

## 利用者体験と鑑賞への誘発に関する実証的研究

—館種を越えた連携によるリレーワークショップを活用した新たな鑑賞教育の提案—  
An Empirical Study on the induction of the appreciation and the user experience  
—Proposal of a new appreciation education by utilizing the relay workshop  
by museums species cooperation beyond—

九州産業大学美術館  
西 嶋 昭二郎  
Shojiro Nishijima

### 1. 研究の背景

近年、日本の教育現場では「体験」「コミュニケーション」「鑑賞」というキーワードが取り上げられ、鑑賞教育が情操教育の根幹を成し、豊かな心が育つ「生きる力」に繋がっていくとしている。

それは、平成23年度からの新学習指導要領改訂の指針となった平成20年1月の中央教育審議会の答申において、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善の⑦図画工作、美術、芸術の項目では以下のように示されているからである。

- 図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）については、その課題を踏まえ、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する。
- このため、子どもの発達の段階に応じて、各学校段階の内容の連続性に配慮し、育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にするとともに、小学校図画工作科、中学校美術科において領域や項目などを通して共通に働く資質や能力を整理し、〔共通事項〕として示す。
- 創造性をはぐくむ造形体験の充実を図りながら、形や色などによるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かにかかわる態度をはぐくみ、

生活を美しく豊かにする造形や美術の働きを実感させるような指導を重視する。

- よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど、鑑賞の指導を重視する。
- 美術文化の継承と創造への関心を高めるために、作品などのよさや美しさを主体的に味わう活動や、我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する。\*下線は筆者による

他に平成25年6月14日付けで「第2期教育振興基本計画」（文部科学省）が閣議決定された。ここでは、東日本大震災により我が国を取り巻く危機的状況が一層健在化・加速化していることから「社会を生き抜く力」「未来への飛躍を実現する人材の養成」「学びのセーフティネットの構築」「絆づくりと活力あるコミュニティの形成」の4つの基本的方向性を決め、体験活動や鑑賞教育の充実を図ることで豊かな心の育成となり「社会を生き抜く力」に繋がるとしている。

また、平成26年9月に2020年オリンピック・パラリンピック競技大会が東京で開催されることが決定したことに伴い、「文化芸術の振興に関する基本的な方針の第4次基本方針」（文化庁）が平成27年5月22日に閣議決定された。その中で「第2文化芸術に関する重点施策の重点戦略2」は以下のように示されている（抜粋）。

- 新進芸術家の海外研修やその成果を還元する機会を充実したり、国内での研修機会を得られるようにしたりするほか、顕彰制度を拡充する等、将来の芸術家、鑑賞者や、伝承者にもつながる子供や若者の「創造力」と「想像力」を豊かにするため、子供の発達段階に応じて、多彩な優れた芸術鑑賞機会、伝統文化や文化財に親しむ機会を充実する。
- 子供たちのコミュニケーション能力の育成に資する文化芸術に関する体験型ワークショップをはじめ、学校における芸術教育を充実する。

今回の研究は、こうした体験、コミュニケーション、鑑賞の指導を重視する子どもたちを取り巻く現状を基に研究を進めることとした。

さらに、以下の事例も研究の誘因となっている。それは九州産業大学美術館の鑑賞活動に参加した子どもがデザイナーズチェア（＝バルセロナチェア、スペインの王様椅子と言われる）の解説を学芸員から聞いた後、日常生活に戻り、たまたま入ったお店にあったデザイナーズチェアを見て、自信満々にデザイナーズチェアの名称を答えていたという。

この事例から博物館での鑑賞活動が蓄積体験となることで他の物事への感情・興味・関心が高まり、さらなる鑑賞への誘発が起き、確かな知識の獲得につながっていくことを、他のワークショップから実証研究してみたいと考えたからである。

## 2. 目的

今回の研究は、アメリカのジョージ・E・ハインが提唱する「利用者は、すでに知っていることと関連づけながら、博物館の資料を理解しようとする」という構成主義的博物論の立場を基にし、「鑑賞とは利用者の体験の追体験から、感情が動かされる」という仮説を立てた。

そのため、子ども・保護者・学生等を対象に九州産業大学美術館の単独のワークショップや複数団体が協力するリレー式ワークショップを通じて、鑑賞への誘発（感情・興味・関心の高まり）が得

られるかを実証研究の目的とした。

また、館種を越えた連携協力によるリレー式ワークショップを開催することが、新たな博物館文化の形成に寄与できるかも研究の目的としたい。

## 3. 研究方法

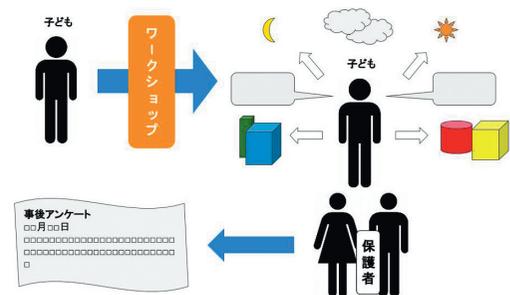
調査は質的研究法に基づき、ワークショップ参加後、日常で子どもたちが鑑賞への誘発とみられる行動や発言があるかどうかについて保護者に事後アンケートを実施した。[図1]

具体的には単独で行なった2回のワークショップと4団体が協力開催したりレー式ワークショップ（各団体1回計4回）の計6回のワークショップに参加した子どもたちに、それぞれどのような変化が起こるかを調査項目とした。

事後アンケートは以下の3つの質問で構成した。各質問に対し該当するものには、具体的に子どもの変化を記述した。

[質問項目]

- ①ものづくりへの感情・興味・関心が高まった発言や行動の変化があったか？
- ②テーマへの感情・興味・関心が高まった発言や行動の変化があったか？
- ③ワークショップに参加して経験したことへの感情・興味・関心が高まった発言や行動の変化があったか？



[図1] 研究方法の概念図

### 3.1 単独ワークショップ

単独ワークショップは九州産業大学美術館が主催するワークショップ2回を調査対象とした。1回目は「光」をテーマに立体万華鏡を制作した。

2回目は「アニメーション」をテーマにフェナキストスコープ（おどろき盤）を制作した。それぞれ小学生を対象に感情・興味・関心の高まりをアンケート調査した。[図2]



[図2] 単独ワークショップのイメージ

(1) 第23回 九州産業大学美術館所蔵品展「光と影」関連イベントワークショップ「立体万華鏡をつくろう！」

実施日：平成27(2015)年5月9日(土)

実施場所：15号館103番教室・美術館展示室

参加者：10名(小学3～6年生)

ボランティア学生：15名(経済学部経済学科5名、国際文化学部臨床心理学科1名、商学部観光産業学科2名、商学科4名、経営学部産業経営学科1名、工学部住居・インテリア設計学科1名、情報科学部情報科学科1名)注：学生は「社会教育計画・演習」「課題解決演習A」の受講生を含む

本プログラムは第23回九州産業大学美術館所蔵品展「光と影」の関連イベントとして開催した。

今回の活動では立体万華鏡を制作した。ボランティア学生15名と小学生3～6年生10名の計25名を6班に分けて、活動を行なった。

まず、見本の立体万華鏡を見て感じる光のオノマトペ(例えば、キラキラ、ピカピカなど)を子ども達に言ってもらい、光に関心が持てるようにした。その後、開催中の展覧会「光と影」を鑑賞し、青ざめた光や透明な光などに関するオノマトペを見つけることで、たくさん光の表現について各班で意見交換をした。

昼食後、展覧会で見た作品から見つけたオノマ

トペをテーマに立体万華鏡の図柄を考え、制作した。立体的なイメージは小学生には難しい部分もあるので、学生がフォローしながら完成させた。完成した立体万華鏡を覗きこんだ子どもたちの表情は驚きと喜びに満ちていた。

最後に作品の発表会を行なった。各作品を共有できるように万華鏡の中をカメラで撮影し、モニターに映して発表した。

〈タイムスケジュール〉

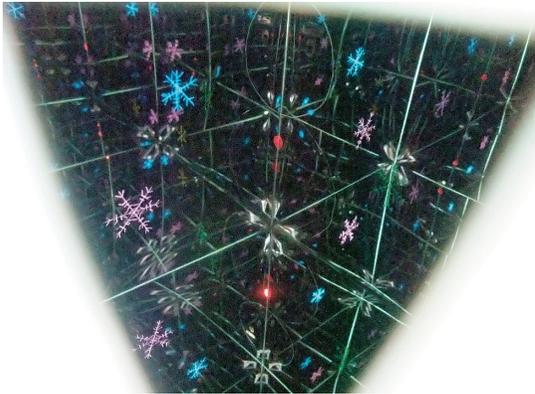
- 11:00 あいさつ 自己紹介 万華鏡についての話 展覧会見学 [図3]、光のオノマトペ交換
- 12:00 昼食
- 13:00 制作の説明
- 13:30 制作開始 [図4]
- 14:50 作品発表会 [図5]
- 15:30 集合写真撮影 [図6]
- 15:40 解散



[図3] 展覧会作品鑑賞



[図4] 立体万華鏡の制作



【図5】 立体万華鏡の中をカメラで撮影



【図6】 集合写真

## (2) アートキャラバン隊によるワークショップ ちびっこ・ワークショップ「おどろき！アニメーション！」

実施日：平成27(2015)年7月20日(月・祝)

実施場所：1号館5階N501番教室

参加者：29名(小学3年～6年生)

ボランティア学生：34名(芸術学部美術学科1名、デザイン学科2名、写真映像学科2名、経済学部経済学科7名、国際文化学部臨床心理学科1名、国際文化学科5名、商学部観光産業学科2名、商学科10名、経営学部産業経営学科1名、工学部住居・インテリア設計学科1名、情報科学部情報科学科1名、卒業生1名)注：「社会教育計画・演習」「課題解決演習A」「博物館実習生」の受講生を含む

本プログラムは特別展「卒業生—プロの世界—vol.6 森りょういち展 おいでよ、りょういちの森」の関連イベントとして開催した。

プログラムの到達目標はおどろき盤(フェナキ

ストスコープ)という1980年代に開発されたアニメーションを楽しむ玩具を制作し、アニメーションへの興味・関心を高め、今後のものづくりに活かすこととした。

まず活動の理解を深めるために、アニメーションの歴史を話した。その後、アニメーションの原理を2枚の紙で2コマのバラバラマンガで体験した。それを活かして2コマから12コマに増やし、各々のアニメーションを制作した。次に1枚1枚のコマをはさみで切り離し、おどろき盤の台紙に貼り付け完成させた。最後に各班で自分の作品の工夫したところや頑張った所を発表した後、全体で作品鑑賞会を行った。

### 〈タイムスケジュール〉

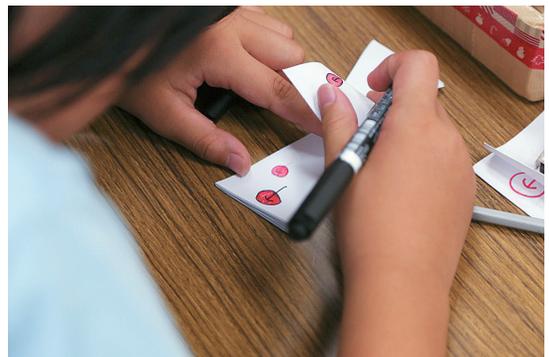
13:00 自己紹介

13:10 趣旨説明／アニメについての話【図7】

13:30 制作開始【図8】



【図7】 アニメーションの歴史の話



【図8】 バラバラマンガの制作

- 15:00 作品鑑賞会 [図9]  
 15:35 集合写真撮影 [図10]  
 15:45 終わりのあいさつ  
 16:00 解散／展覧会見学ツアー（希望者のみ）  
 16:30 展覧会見学ツアー終了



[図9] 作品鑑賞会



[図10] 集合写真

### 3.2 リレー式ワークショップ

4団体でのリレー式ワークショップ（各団体1回ずつ計4回）では「いろいろ」という共通テーマで科学、美術、水族という各団体の特色を活かしたプログラムを実施した [図11]。参加者は4回とも同じで、小学1年～中学校1年の男女19名だった。子どもたちには九州産業大学学生が制作補助者として活動に参加した。(博物館実習生、他) 参加者：19名（中学1年3名、小学6年4名、小学5年1名、小学4年2名、小学3年3名、小学2年4名、小学1年2名）



[図11] リレーワークショップのイメージ

(1)「形のいろいろ☆葉の形を見る、作る、かざる！」

実施日：平成27(2015)年4月18日(土)

実施場所：九州大学箱崎キャンパス21世紀交流プラザ

ボランティア学生：8名

九州大学総合研究博物館では自然を観察しながら葉っぱの形や生態について知るツアーの後、粘土で葉っぱの形のブローチを作った。

〈タイムスケジュール〉

- 11:00 21世紀交流プラザに集合  
 11:05 交流ワークショップ  
 11:35 保護者向け説明会  
 11:50 昼食  
 13:00 趣旨説明  
 13:05 葉っぱの形のいろいろ、観察ツアー [図12]  
 13:30 お気に入りの葉の形をミニチュアで再現！ [図13]  
 15:00 作品鑑賞会 [図14]・振り返り



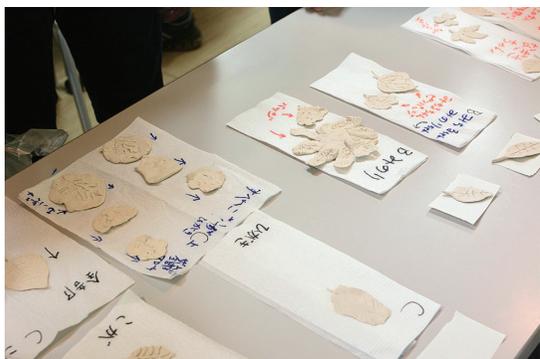
[図12] 植物観察ツアー

15:20 次回のご案内／アンケート記入

15:30 終わりのあいさつ、解散



〔図13〕 ミニチュアの制作



〔図14〕 作品鑑賞会

(2) 「色のいろいろ☆デザインいろいろ、オリジナルバッグを作ろう」

実施日：平成27(2015)年5月16日(土)

実施場所：九州産業大学2号館1階円形ホール

ボランティア学生：10名

九州産業大学美術館では展覧会鑑賞の後、そのイメージをコットンバッグにマスキングテープで表現したオリジナルバッグを制作した。

〈タイムスケジュール〉

13:00 2号館円形ホール集合

13:30 趣旨説明

13:45 展覧会作品鑑賞〔図15〕

14:10 大学構内散策

14:40 休憩

14:50 作業開始

15:50 作業道具の後片付け

16:00 作品鑑賞会・振り返り〔図16〕〔図17〕

16:25 次回のご案内

16:30 終わりのあいさつ、解散



〔図15〕 展覧会作品鑑賞



〔図16〕 作品鑑賞会の様子



〔図17〕 集合写真

(3) 「種類のいろいろ☆チリモンストラップを作ろう」

実施日：平成27(2015)年6月20日(土)

実施場所：海の中道海洋生態科学館

ボランティア学生：11名

海の中道海洋生態科学館ではプランクトンを採取し、顕微鏡で観察した。その後、様々な海の生き物のチリモンを使って、オリジナルキーホルダーを制作した。

〈タイムスケジュール〉

13:20 海の中道海洋生態科学館近辺栈橋へ集合

13:30 趣旨説明

13:50 プランクトン採取 [図18]

14:20 マリンホールへ移動

14:30 プランクトンを顕微鏡で観察

14:45 休憩

15:00 チリモン (=チリモンモンスター) の話



[図18] プランクトンの採取



[図19] ストラップの制作

15:05 チリモン選別ストラップ制作 [図19]

16:10 作品鑑賞会／振り返り [図20]

16:25 次回のご案内／アンケート記入

16:30 終わりのあいさつ、解散



[図20] 集合写真

(4) 「思い出いろいろ☆ワークショップでの思い出をお話して絵本をつくらう」

実施日：平成27(2015)年7月18日(土)

実施場所：九州大学箱崎キャンパス21世紀交流プラザ

ボランティア学生：11名

CLCworksの活動は、3回のリレー式ワークショップを振り返り、参加者の蓄積体験をもとに絵本を制作し読み語りをを行った。

〈タイムスケジュール〉

11:00 九州大学21世紀交流プラザ集合

(会場に展示している絵本を読んだり九州大学総合研究博物館の展示見学) 昼食

13:00 絵本づくりの説明

13:15 思い出を語ろう

13:45 絵本をつくらう [図21]

15:35 作品発表会 (絵本の読み語り) 振り返り [図22]

16:25 アンケート記入

終わりのあいさつ [図23]

16:30 今後の調査について説明

17:00 解散



[図21] 絵本の制作



[図22] 制作した絵本の読み語り



[図23] 集合写真

#### 4. 研究結果

単独のワークショップの事後アンケートでは、

- 「図工の教科書を何度も見るようになった」
- 「国語の教科書で光の表現に注意して読むようになった」
- 「いろいろ自分で作ってみたいと思って科学雑誌の定期購入をしました」

○「『アニメを見ている時、これも同じ方法でできているの?』と聞いてきた」

など、ワークショップのテーマやものづくりへの興味・関心が高まった行動や発言が見られた。

連携したワークショップでは保護者への口頭での聞き取りや、各ワークショップの終了後に行った4団体での振り返りなどで、自宅に帰ったあともワークショップで経験したことを活かしたものづくりを行っている行動や発言の事例があった。

#### 5. 考察

事後アンケートを分析すると、全活動で参加後の子どもたちの感情・興味・関心の高まりが見られた。リレー式ワークショップに関しては同じ子どもたちでの活動により、子どもたちのコミュニケーション能力の高まりが見られた。また、4団体の特色を活かした「いろいろ」をテーマにしたワークショップに参加することで、表現の幅の広がりや認められた。その他、4団体の連携協力により、担当した学芸員は各館のワークショップの良さや違いを知ることができ、様々な視点から話しあうことができた。このような他団体との交流は貴重な機会となり、今後の各団体のワークショップの充実が期待される。

#### 6. 今後の課題

今回の調査から、「鑑賞とは利用者の体験の追体験から、感情が動かされる」という仮説は概ね検証できた。また、追体験による鑑賞への誘発は、その後、対象者の学習活動への進展も窺い知ることができた。しかし、まだまだ事例が少ないため、今後もさらに調査を続けていき、博物館学研究的に寄与していきたいと考えている。

---

\* 本稿は「全国博物館学講座協議会西日本部会平成26年度研究助成」および「JSPS 科研費 24220013」による研究成果の一部である。

\* 研究を進めるに当たり、リレーワークショップでは海の中道海洋生態科学館の高田浩二館長

(現福山大学教授)、三宅基裕学習交流課次長、九州大学総合研究博物館三島美佐子准教授、CLCworks坂倉真衣副代表の協力を得ました。また九州産業大学美術館の緒方泉教授から多大な研究指導助言を受けました。ここに記して心より感謝申し上げます。

\* 本稿の「鑑賞」とは、従来の「芸術作品を見聞きしたものを味わう」だけではなく「自他の作品や日常で見聞きしたものを味わう」も含みます。

### 参考文献・資料

- 1) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』p.97、平成20年1月17日
- 2) 文化庁『文化芸術の振興に関する基本的な方針の第4次基本方針』p.18、平成27年5月22日
- 3) 文部科学省『第2期教育振興基本計画』p.44、平成25年6月14日
- 4) 文部科学省『第2期教育振興基本計画概要』p.3、平成25年6月14日
- 5) George E.Hein著、鷹野光行翻訳『博物館で学ぶ』同成社、2010、p.233